

No. J2318 9、10世紀東アジア国際貿易と南海貿易の関連性と政治的影響 ー海事考古学と文献史学の成果を中心にー
獨協、早稲田、上智、東京経済大学非常勤講師 新飼 早樹子
本研究は9、10世紀にみえる東アジアの国際交易と南海貿易に注目し、海事考古学の成果を文献史学の成果に結びつけ、東アジアと東南アジアにまたがる海上ネットワークの解明と、その海上ネットワークが東アジア諸国に与えた政治的影響を明らかにするものである。新羅国際貿易の拡大と各地域の対外的な性格を把握するために、地域の様相に対する文献史料と考古学的な成果を検討し、9世紀前半の状況を知るために、新羅外港という観点から晋州、蔚山、西南海岸地域という3つの地域に注目した。 検討の結果、9世紀の新羅は各地に複数の外港を設置し、西アジア及び南海貿易の東南アジアとつながる国際貿易を展開した。これを背景に、東南アジアの国際貿易ネットワークは日本に拡大し、その中心には新羅商人の活発な活動が存在した。江南の在唐新羅人は唐の貿易網と南海貿易網のなかで活躍した可能性が高く、山東半島の在唐新羅人と区別される性格である。東アジア国際貿易網は、南海貿易と繋がり、また東アジアの国際貿易網は日本まで拡大され、その中には新羅商人たちの活発な活動が存在した。 統一期新羅の外港は、それぞれ中央社会と結ばれる一方、地方で成長していた在地勢力とも密接に関連し機能していた。もちろん統一新羅期の新羅国内の外港は、中央の影響力を排除して運営することはできなかったものの、中央との連結強度という点では、いくつかの層位が存在した。そして各外港と周辺在地勢力との連携でも違いがみられる。このような多元的な構造こそが、新羅が国際貿易を展開した一つの要因であったと考えられる。 9、10世紀東アジアの国際関係は拡大した東アジア国際貿易を背景に間接的に東南アジア・西アジア・イスラム地域の品目が将来される交易網が形成されていた。つまり東南アジアやイスラム地域と直接的な関係のない日本の場合でも、新羅商人を媒介して唐、イスラム世界、南海貿易などで流通する外来品を入手できていたと理解することができる。